

地域で育てる

子どもたちのさまざまな
居場所を訪ねます

「親と子の広場」 さくらっこ



濱崎由紀子 (保育士)

〔所在地〕 福島県福島市花園町 3-6
桜の聖母短期大学
「親と子の広場」
〔連絡先〕 024-534-7137 (代表)

福島市にある桜の聖母短期大学の敷地内で運営されている「さくらっこ」は、「来たいと思う親子が誰でも訪れられる場所」として開設されている子育て支援の場です。土曜日の十時から十二時三十分を開室され、対象は〇歳から小学校六年生までの親子。登録料、参加費といったものはありますが、申し込みは不要で入退室も自由、部屋の前に広がる広場の出入りも自由で、それぞれが心の向くままに過ごし、活動をしていました。

私たちが訪ねた十一月月上旬は山の本々が少しずつ色づき始めた頃で、九時過ぎに到着すると、保育室内では学生を交えた何人かのスタッフが部屋のしつらえをしているところでした。おもちゃや遊具もある中、大きな座卓にはリースの素材や工作の材料があったり、奥ではキッチンでお菓子作りの下準備が始まっていたり、手前の立派なテーブルにはお茶の準備も整えられていました。

訪問者：濱崎由紀子（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー保育士）、菊地知子（同ナーサリー主任保育士）
矢萩恭子（田園調布学園大学） ※所属は訪問時のものです。

十時近くになると、親子連れがポツポツと入室。久しぶりに再会する先生と感激の挨拶をする人もいれば、やりたいことにまっしぐらに進んでいく子どももいれば、「今日は何かあるのかな……」といった面持ちで部屋をゆるゆると歩き回ってみる人もいます。

準備を進めていたスタッフたちは、待ち構えていた思いを前面に出すことなく迎え、またそれぞれの持ち場にとらわれることなく全体の空間とすべての人を受け入れているように感じられました。

「子どもは大事。でも、大人の私も大事。」

「さくらっこ」の冊子の表紙に、この言葉が書かれています。訪れる子どもにとっては「何でも試して感じる場」であり、親にとっては「つながる」「お茶する」「話す」場であり、学生にとっては「実際に子どもたちや保護者の方々と触れ合い、感じる体験をし、学びを

深める場」ということです。参加していた桜の聖母短期大学の学生は、授業ではなくボラ

2016年度
～ 桜の聖母短期大学 ～
親子の広場

さくらっこ

子どもは大事。
でも、大人の私も大事。

人生で最も大切な
歳を過ごす、子育て時代。
その時間をじっくり味わって欲しい。
それが私たちの願いです。

校の聖母短期大学が運営して、10年目に入る広場です。

専任の教員や保育者がそれぞれの専任の担当として、子どものおもちゃを充実、保護者の育児の悩みや相談を自由な雰囲気の中でできるように続けてきた、子育て実践広場です。気軽に参加し、大人も子どもも、スタッフに話しかけていただけるような場を作ることが目指しています。

スタッフ紹介

「親子の広場」責任者
奥田 美由紀 (代表) 小・中・高
桜の聖母短期大学 福祉文化学部 福祉文化学系 教員
【資格】
福祉施設長 保育士

長谷川 美香 小・中・高
桜の聖母短期大学 福祉文化学部 福祉文化学系 教員
【資格】
福祉施設長 保育士

狩野 奈緒子 小・中・高
桜の聖母短期大学 福祉文化学部 福祉文化学系 教員
【資格】
福祉施設長 保育士

親子の広場のご案内

小さな「さくらっこ」 (0歳～3歳児)	「さくらっこ」 (4歳～小学生)
大曜日 全曜日	土曜日
日時 10:00～11:30	10:00～12:30
場所 (リリアム館(保育棟))1階 保育室	
監修料 (保険料)	300円(子ども1人) ※登録料(年度別)別
無料	500円(親子1組) ※よびたいはプラス200円
参加費	※野外出費参加者は1,000円(親子1組) (※うたがはプラス500円)
持ち物	お茶、お菓子(持ち寄り)や飲み物や遊具など、お茶とおしゃべりできるものをご用意ください。
スタッフ	奥田 美由紀 狩野 奈緒子 長谷川 美香
その他	本学教員・学生も参加します。

申し込みは不要です。
お気軽にお立ち寄りください。

桜の聖母短期大学
〒970-0099 福島県いわき市
tel.024-534-7137(代表)

代表 奥田美由紀
長谷川美香
狩野奈緒子

▲「さくらっこ」2016年度リーフレットから



ンティアで、そして自分のアイデアや制作したものを提供しながら参加をし、その場に応じた対応を考えながら動いていたことが印象的でした。例えば、赤ちゃんの世話のために上のお姉ちゃん

の姿など、大人も心地よく過ごせる空間でした。赤ちゃんが寝てしまうと、スタッフよりも早く、お母さん同士で布団を（どこからか）出してきて、ちょうどいい場所に敷いてあげていました。

危険がない限り、何をして遊んでもOK

遊びに十分につき合えないお母さんがいたとき、学生が赤ちゃんをすつと受け取って、心地よく過ごせる場所へ連れていき、お姉ちゃんはお母さんと一緒に、腰を据えて遊びにじっくりと取り組んでいました。その何気ない配慮と判断の奥には普段の志があり、また「さくらっこ」が何をしてでも大丈夫な場所であるからこそなのだと感じました。

入室した子どもたちは、はじめは親の手を握る姿もありますが、自分の遊びを見つけると、安心したように遊び始めています。大人が何かをしてくれることを頼るわけではなく、許可を求めるわけではなく、のびのび過ごしています。いつの間にか部屋から出て、広場の端の松ぼっくりを集める子どもがいると、スタッフが「お母さんはゆつくりしていてください」と呼びかけながら網を持って同行。スタッフも含めて大人も子どもも「何をして大丈夫」という安心、それは、何でもしてよいということではなく、「自身の判断を肯定

して支えてくれるものがあるという確信」があるからこそ、のびのび過ごせるのでしょう。
子どもの姿そのものが大切

私たちが訪ねた日には、「さくらっこ」の運営に前年度まで携わっていらした長谷川茂先生が久しぶりに来室されていました。長谷川先生は、お茶の水女子大学児童学科で教務補佐員を務められ、その後、宮城教育大学で長く教鞭をとられ、「さくらっこ」では子どもの姿を見守り、保護者の相談にのってこられた方です。この日、長谷川先生に会った保護者の皆さんは、懐かしさに涙ぐんだり抱きあったり、お互いの成長と健康を喜びあっているように見受けられました。

その長谷川先生の教えを受けた狩野奈緒子先生が、現在の「さくらっこ」の中核として、場をつくり、携わっておられます。狩野先生は、保育中はニコニコと周りを見回し

ていらして、「私より、来ているお母さんたちのほうが、部屋のことをいろいろ知っているのよ」と、のんびりと支えていらっしゃるのが印象的でした。

保育後のカンファレンスは、学生も含めその日参加したスタッフ全員で行われました。その中で長谷川先生は、「子どもが始まり」「子どもは面白いよ」という言葉を強調して伝えてくださいました。そして、ご自身の懐かしい話を交えながらも、その日来た子どもの課題についての見解もお話しくいただきました。子どもの姿そのものを大切に
する保育がこの地に着実に根付き、それが学生に受け継がれていることをうれしく、ありがたく感じました。

(二〇一六年十一月訪問)

